

〈序論〉

なぜ、論文のテーマにサイドシュートを挙げたのか。その理由は二つある。まず一つは、サイドというポジションが、筆者がハンドボールを始めてからずっと関わってきたポジションであるということ。そしてもう一つの理由は、他のポジションに比べて、ノーマークになる機会が多いポジションであるということである。そこで、アテネオリンピックにおけるドイツ代表の両サイドのシュートを分析し、どのようなポイントが得点につながるのか、また、どのようなポイントが優れているのかを明らかにするために、サイドシュートの運動の組み合わせを局面構造の視点を中心に考えていく。

〈本論〉

1章 ハンドボールの構造的特性

ボールゲームの特性をハンドボールと照らし合わせることによってボールゲームとしてのハンドボールの特性を理解することができる。ここで、ハンドボールの理念と特性について触れ、主に個人戦術についてまとめた。個人戦術において重要な要素の一つが「運動の共感」である。「運動の共感」は「他者観察の自己観察化」から生まれる、他人の動きを自分の中に取り込み、自分の動きとする。

2章 ゲームの運動観察方法

個人戦術をみるとき、運動モルフォロジー的考察法で観察していく。この考察法は、スポーツ運動を目で見て外から知覚してだけでなく、体験し、中から知覚していくことが重要である。1章でも述べたが、これこそ「他者観察の自己観察化」であり、「運動の共感」である。マイネルの諸カテゴリーには①運動の局面構造、②運動のリズム、③運動の伝導、④運動の流動、⑤運動の弾性、⑥運動の先取り、⑦運動の正確さ、⑧運動の調和の8つが挙げられるが、その中でも、①運動の局面構造、⑥運動の先取り、⑧運動の調和の3つが大きく関係していると考え、これらを基に分析を試みた。

3章 運動観察の実際

観察対象はアテネオリンピック・ドイツ代表の両サイドの選手である。それらを大きく5つに類型化し、印象分析した。それらは、①右サイドの逆スピンシュート、②右サイドのノーマルシュート、③右サイドのクイックシュート、④左サイドのノーマルシュート、⑤左サイドのループシュート、に類型化することができた。その結果、「走る」「跳ぶ」「投

げる」の三つの局面において、滑らかな運動の融合を見て取ることができた。

〈結論〉

本研究では、ハンドボール競技における個人戦術に関する研究を、アテネオリンピック・ドイツ代表における両サイドの運動観察を中心に行ってきた。その方法は、サイドシュートの運動がどのように組み合わさっているかを局面構造の視点から、典型例を抽出しながら考察した。

その結果、サイドシュートは「走る（位置取り）」「跳ぶ」「投げる」の三つの運動組み合わせから構成され、それぞれの局面の融合によって成り立っていることが分かった。

全ての典型例において優れていると思われる点を三つ挙げるとすると、

- ① 運動の先取り能力が優れている。これらは、シュートに行くまでの走り込みの終末局面と、跳ぶ運動の準備局面への融合から見て取ることができる。ディフェンスの裏をとることでノーマークになり、自分の間合いでシュートを打つことにつながる。これは、日頃の練習による積み重ねが必要である。
- ② 筋力に長けている。これは、跳ぶ運動の準備局面において、どんな体勢からでも高い跳躍ができる下半身のバネと、主要局面でのディフェンスに当たり負けしない強い体幹。また、終末局面において腕だけでも鋭いシュートを打つことができる強い上体の筋力があるということ。そして、それぞれの局面の融合がスムーズに行うためにもまた、筋力はない。これは、日頃のウェイトトレーニングで、ある程度身につけることが可能だ。
- ③ あらゆる場面を想定し、それに対応できる適応能力に優れている。キーパーとの駆け引きにおいて、どのような位置取りをされようがそれをかわすことができている。これは、数え切れないほどのキーパーとの「対峙」を重ねることによってのみ身につくものであり、一日や二日で簡単に身につくものではない。様々なタイプのキーパーと「対峙」することによってのみ身につくものであると考えられる。

このようにサイドシュートの得点力を上げるためのポイントを発見することができた。そしてこれらは、普段われわれが日常行っている練習によってのみ身につくという結論に達した。本当に大切なことは、どのようにしたらシュートが入るようになるかという意識を持って練習に取り組む姿勢なのかもしれない。

(引用・参考文献省略)